

戦争と中央大学プロジェクト

# 戦後 70 年記念シンポジウム

## 「戦争と中央大学」

開催日 2015年10月21日(水) 13時20分-14時50分

コーディネーター 中央大学文学部教授 松尾 正人

パネリスト 中央大学経済学部教授 土田 哲夫

中央大学大学史資料課嘱託 奥平 晋

中央大学法学部准教授 岡田 大士

中央大学総合政策学部教授 松野 良一

会場 中央大学 多摩キャンパス 8号館 8307教室

中央大学

## 目 次

開会	1
酒井正三郎中央大学総長・学長挨拶	2
廣岡守穂中央大学法学部教授挨拶	5
「アジア太平洋戦争と大学」	
(中央大学経済学部教授 土田 哲夫)	7
「戦後 中央大学の戦没学生調査 - 関係史料をめぐって -」	
(中央大学大学史資料課嘱託 奥平 晋)	15
「戦時体制下における理工科学校～中央大学理工学部へ」	
(中央大学法学部准教授 岡田 大士)	17
「元特攻志願兵の証言 - 中央大学と戦争 -」	
(中央大学総合政策学部教授 松野 良一)	21
質疑	27
シンポジウム配布資料、投影資料	31

## 開 会

○中島康予法学部長（総合司会）

皆様、こんにちは。本日は、戦後70年記念シンポジウムに多数ご参集くださりまして、誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。ただいま紹介にあずかりました法学部長の中島でございます。本日、総合司会を務めます。どうぞよろしくお願いたします。開会に当たりまして、簡単にご挨拶を申し上げます。

2015年は、皆様方ご案内のように、アジア太平洋戦争の終結から70年、そして本学中央大学にとりましては、創立130周年を迎えるという節目の年に当たります。この節目の年に当たりまして、中央大学では戦争と中央大学プロジェクトを始動させまして、三つの企画を執り行うことといたしました。

一つ目は既に済んでおりますけれども、創立記念日の7月8日に、本学の名誉教授でいらっしゃる菅原彬州教授からご講演をいただきました。「戦中・戦後の中央大学」と題してお話をいただきまして、その記録は講演録としてまとめてございます。

二つ目の企画は写真パネルによる展示でございます。戦後70年、改めて戦争と中央大学を考えるということで、現在、モノレール駅近くのグリーンテラスで展示を行っております。

そして最後に三つ目の企画でございますけれども、1943年、神宮外苑の競技場で出陣学徒壮行会が行われました、本日10月21日のシンポジウムでございます。

これらの3つの企画を通し、中央大学といたしましては、戦争と大学、戦争と中央大学の関係について考える機会を、学生の皆さん、教職員、学員・卒業生の皆様、そして本日お集まりの広く地域・社会の皆様を提供し、とりわけ若い世代の方々にこの戦争の記憶を語り継いでいく、そういった機会にしていきたいと考えてございます。

それでは、本日のシンポジウム開催に当たりまして、本学の総長・酒井正三郎よりご挨拶を申し上げます。

それでは酒井先生、お願いいたします。

## 酒井正三郎中央大学総長・学長挨拶

皆さん、こんにちは。紹介をいただきました、総長・学長の酒井正三郎でございます。

本日は、戦後70年記念シンポジウム「戦争と中央大学」に、在学生諸君、教職員、さらには学外や地域の多くの皆様方のご来場を賜り、誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。

ただいま司会の中島先生のご挨拶にもございましたとおり、今年2015年に、日本と世界はアジア太平洋戦争の終結から70年という節目を迎えました。この8月には広島や長崎を初め、日本各地でさまざまな祈念及び追悼の式典が執り行われましたことは皆様もご存じのとおりでございます。

終戦後70年目の本年は、同時に中央大学にとりまして創立130年目の記念の年でもございます。本学ではこの節目に当たり、さきの戦争の時代と中央大学をさまざまな観点から検証し、皆さんと一緒に考えていきたいという思いから、本日のシンポジウムを初め、講演会や資料展示など一連の取り組みを行ってまいりました。

先ほどもございましたとおり、その第一弾といたしまして、本学130年目の創立記念日でありました7月8日には記念講演会を行いました。本学の歴史をまとめた中央大学100年史の専門委員会の主査として編纂に長く携わってこられました菅原彬州名誉教授を迎え、「戦中・戦後の中央大学」と題してお話をいただきました。菅原名誉教授には、中央大学が戦時体制にどのように組み込まれていき、学生たちには何が求められていったのか、また敗戦によって中央大学はどのような大学へと変わらなければならなかったのかに主眼を置き、中央大学の歩みを振り返っていただきました。この講演録は、本学公式ウェブサイト「中央大学の歴史」のページを訪れていただければ、いつでもご覧いただけます。どうぞ皆様にもご一読いただければと存じます。

また、記念行事の一つとして、本学に残る資料を写真パネルにして展示してございます。当時の学生目から見た戦争、教育政策と大学、学徒出陣などについてのご理解を深めていただければという意図のもの

とで行っているものでございますので、お帰りの際はぜひモノレール駅手前のグリーンテラスにもお立ち寄りいただきたいと存じます。

さて、本日10月21日は、今を遡ること72年前の1943年に、明治神宮外苑競技場、先般、取り壊しが行われました国立競技場跡地でございますけれども、そこにおいて出陣学徒壮行会が開催されたその日に当たります。まだ輝ける人生が始まったばかりの青春時代に、学びの志半ばにして二度と帰ることのできない戦地に向かわざるを得なかった学生たちの無念を思い、今、こうして平和な時代に生きていることのありがたみを改めて深く心に刻むため、中央大学として、本日のシンポジウムの開催日は、以前よりこの日と決めておりました。

先ほどご紹介がありましたとおり、パネルディスカッションでは進行役を含めまして、中央大学の4人の先生方がご登壇いたします。大学の歴史、東アジアの国際関係、ジャーナリズム論、近代日本史など、各教員の専門分野ならではの視点からそれぞれの知見を通して、さきの戦争を振り返りたいと思います。

中央大学在学中に戦地へと赴いた元特攻志願兵のインタビュー、動画では、戻れない道と知りながら、両親にさえも秘密のまま自ら志願をした理由、遺髪とともに中央大学の学生帽を家族の元に残して出征した日の記憶、また朝鮮で終戦を迎えて故郷に帰り、家族が迎えてくれたときの心情など、貴重な証言を聞くことができます。この記録は、一昨日の朝日新聞夕刊に、現役大学生のゼミにおける取材活動として、後ほど登壇されます松野良一総合政策学部長・教授のコメントとともに大きく掲載されました。

72年前の今日、出陣する学徒壮行会会場の神宮外苑競技場には、秋の冷たい雨が降っていたそうであります。その中を2万5,000人も学徒が行進し、その姿を、女学生を含む6万5,000人の人々が拍手で見送りました。しかし、まだ二十歳前後でありながら、突然、戦地に向かう運命となった若者たちの心の内は、どれほど鼓舞されても決して晴れやかではなかったことと思われまします。

現在、中央大学のキャンパスでそれぞれの希望を胸に日々学んでいる学生の皆さんも、もしあの時代に生きていれば、そのような運命に立ち向かわざるを得ませんでした。そのことを考えると、今当たり前

のように暮らし、学び、自由な意思で将来を思い描けることの意味の大きさを、もう一度改めて考えざるを得ません。

本日のシンポジウムがすべての人々にとって平和に暮らせることの尊さを考える機会となりますよう、またこれからの未来を担う若者にとって、学ぶ意味とありがたみについて考える機会となりますよう心より祈念いたしまして、学長としての開会の言葉といたします。

ありがとうございました。(拍手)

○中島法学部長(総合司会) ありがとうございます。

さて、本日のシンポジウムは、廣岡守穂法学部教授ご担当の政治思想史A(いわゆる日本政治思想史を扱う授業でございますが)の授業をおかりし、公開する形で実施をしてございます。

そこで、ご担当の廣岡先生より、一言ご挨拶を申し上げます。

よろしく願いいたします。

## 廣岡守穂中央大学法学部教授挨拶

皆さん、こんにちは。毎週この時間に、この教室で授業を担当しております廣岡守穂でございます。

日本政治思想史をやっておるんですけども、実際に昭和15年から昭和20年くらいの思想というのはほとんど扱ったことがありません。授業全体の中で15分か20分もしゃべればいいかなというくらいの量であります。政治思想史ということから申しますと、ほとんど見るべきものがないというのが実情であります。

しかし、きょうは何といっても感無量です。父が、実は先ほど学長がおっしゃった学徒出陣に出ておまして、神宮の森で当時の東條首相の言葉を聞いたわけでありまして、私は子供のときから何回も父に戦争のことを聞いたのでありますけれども、父はその都度、言を左右して一言も答えようとはしませんでした。どんな思いがあったのかと思うと、いまだに父の胸の中は私にはわからないわけでありまして。

一度、私の方から挑発したことがあります。戦争を経験したすべての人は、せめてそのことを自分の子供には語り継ぐ責任があるのではないかと。そのとき父は、何とも言えない顔をして、悲しいような、無念のような、何て言ったらいいかわからないような顔をしてじっと押し黙って、最後にはそっぽを向きました。漏れ聞くところでは、父は戦地に行ったわけではないんですけども、大分、内務班でリンチまがいのひどい目に遭わされたのではないかと聞いたことがあります。

一方、母の方は、戦争中はミドルティーンでありまして、母にとっては戦争の体験より、むしろ戦争というのは戦後体験であったようであります。闇市とか買い出しに出かけるとか、そんな話をしきりにしていたものであります。

きょう、わたしの父から見ると孫よりももっと若い世代の学生のみなさまと、それから、恐らくは父の世代に近い方々もちらほらお見受けいたしますが、どうか我々が70年前のあの経験をお互いに共有ができるように、そして語り継ぐことができるように、ささやかではあ

りますけれども、その機会になればと思っているところであります。  
以上、ご挨拶でございます。(拍手)

- 中島法学部長（総合司会） それでは、これより本日のシンポジウムのコーディネーターをお務めの文学部教授松尾正人先生にマイクをお渡ししたいと思います。  
では、松尾先生、よろしく願いいたします。

- 松尾正人コーディネーター ただいまご紹介をいただきました文学部の松尾と申します。  
司会ということで、きょうの進行を進めさせていただきたいと思  
います。後ほど皆様からもご議論いただくというふうになろうかと  
思いますが、どうぞよろしく願いいたします。  
最初に「アジア太平洋戦争と大学」というテーマで、経済学部の  
土田哲夫先生にご報告をお願いすることになっております。  
どうぞよろしく願いいたします。

# 「アジア太平洋戦争と大学」

中央大学経済学部教授  
土田 哲夫

(当日配付の資料は32ページに掲載)

ご紹介にあずかりました経済学部の土田哲夫と申します。本日はよろしくお願いたします。

本日はパネルディスカッションの最初の報告者として、「あの戦争」アジア太平洋戦争とは何だったのか、そして遠い戦場で、兵士たちは何をし、何を感じたのか、戦場となった国では一体何が起きたのかということをお話しし、全体の導入としたいと思っております。

レジュメの方の「アジア太平洋戦争と大学」と書かれた紙(32ページ)があります。「はじめに」のところ、まず「安倍晋三首相 戦後70周年談話」をあげました。安倍首相の談話は、発表前から安倍氏が比較的保守的な政治家ということでもいろいろな懸念もあり、発表後も批判されておりますが、それでも安倍首相はその談話において、国内外の戦没者に痛惜の念と哀悼の意を表明し、日本の犠牲者300万人のほか、交戦国の若者、中国、東南アジア、そして太平洋の島々など戦場となった地域の無辜の民、罪亡き民の被害にも言及せざるを得ませんでした。

ここに安倍首相の談話を挙げたというのは、このように戦争というのは、単に交戦する二つの、あるいは多数の国の兵士たちだけの関係ではなく、多くの市民、国民が巻き込まれるものであった、総力戦であったということであり、そしてまた戦争によって被害を受けたのは、日本の若者・兵士、それから多くの戦後の国民だけでなく、戦った相手の国々、他国の戦場となった国々、こういった国でもたくさん犠牲者がいたということも心に刻み、戦争のことを考えていかなければいけないのではないかと考えるからです。私が戦争について考える場合の立場を述べさせていただきました。

実際、どのくらい戦争で被害があったのかということは、さまざま

な推定、推計がされております。レジユメ「表1」（38ページ）に、戦争の主要連合国、主要枢軸国だけに限ったものですが、第二次世界大戦の主要国における兵力、戦費、戦死者数など損害、犠牲の表を挙げておきました。フィリピンとかインドネシア、マレーシア、戦場となったアジアの国などについてはここには入っておりませんが、膨大な数であったことと思われまます。

このように、あの戦争、アジア太平洋戦争を論じる場合に、ただ日本の問題としてだけでなく、諸外国、とりわけ中国などアジア諸国との関係、その戦争が与えた被害、そして今に残る記憶の問題というのを現在でも無視できない。そして、現在の日本が周辺諸国との間で平和的な国際関係をつくり出す上でも、この戦争の問題にどう向き合うのかというのは重要な問題であると考えております。

この辺を「はじめに」ということで、第1の「あの戦争は何だったのか」では、アジア太平洋戦争の無意味さというお話をします。

このシンポジウムでは、単に「戦争」と言っておりますし、あるいは「あの戦争」とか「さきの大戦」とか言われておりますが、ここでは1937年7月に始まります日中戦争、それから1941年12月以降の太平洋戦争全体を包括する名称として、歴史学界で定着しております「アジア・太平洋戦争」という言い方を使わせていただきます。

さて、この戦争は一体何のための戦いだったのかというのが、まず一つです。当時の指導者たち、軍や政府は何らかの計画、少なくとも何らかの見通しがあって戦争を行ったはずですが、それが一体何なのか。実は、目的はかなり不明確で見通しが欠如している。そして、当時の国際情勢、あるいは日本や敵国の実力に関する判断も不適切な、無謀な戦いだったと言わざるを得ないと思います。

まず日中戦争です。日中戦争が1937年7月7日の盧溝橋事件によって、最初は偶発的、局地的な衝突から始まり、ずるずると拡大し、戦線は北から南に、沿岸部から奥地へと拡大し、そして長期化していったことはよく知られております。これは奇妙な戦争でした。激烈な戦いが続けられました。とりわけ上海の攻防戦、首都南京攻略戦、武漢攻略戦など非常に多くの血が流され、敵となった中国側でも、味方の日本側でも多くの血が流されました。また現地の民衆にも多くの被害

を与えています。

しかし、そのような激烈な戦いが行われていても宣戦布告は行われず、正式の戦争という国際法的な位置づけはされず、日本はこれを「事変」と称して戦い続けました。また日本はこの戦争において、軍人に対して国際法を守って戦えと、捕虜は寛大に扱えというような教育をしませんでした。それがさまざまな残虐行為などをもたらす一つの要因にもなっています。

さて、この戦争の間、軍部としては早くこの戦争を処理して日本に有利に解決したいということで、日中間では外交交渉も続けられています。これは和平工作とか和平交渉と言われました。しかし、日本側が求めた和平条件というのは非常に過酷なものであったため、当時の中国国民政府は、最初の37年秋から年末にかけての交渉以外、実際には真に受けて行うことはなく、以後は日本側の一方的な働きかけ、中国側の抵抗を切り崩すための工作に終始してしまいます。

さて、その次です。日中戦争が泥沼化する。そして日本が軍事的にも、対外関係の上でも、また経済的にも行き詰まる中で、いわば乾坤一擲の打開策として、対米英開戦、太平洋戦争が企画されます。しかし、それは一体何のための戦いだったのか、戦争の目的、そして大義名分は何かというのは非常に不明瞭でした。

日本の太平洋戦争開戦に至る政策決定過程については、これまで我が国の政治史研究において相当の研究蓄積があります。それによりますと、1941年4月から12月にかけて何度も政府の代表と陸軍、海軍の代表が集まった大本営政府連絡会議が開かれ、そこで軍事、外交など重要国策が討議、決定されております。次いで、天皇が臨席する御前会議において最終的な国策として確定されるという過程をたどります。軍部の方は早くから対米戦争をやれという考えであり、それに納得しない政府の閣僚、あるいは天皇も含む宮中勢力を説得し、全体を引っ張っていくという形で政治過程が進んでいきます。

時期的に対米英開戦、太平洋戦争開戦の決定をしたと言えるのが、1941年11月2日の大本営政府連絡会議と、その3日後の11月5日の御前会議でした。11月2日の連絡会議では「帝国国策遂行要領」が決定され、帝国（日本）の「自存自衛ヲ全フシ大東亞ノ新秩序ヲ建

設スル為」開戦するとうたわれております。すなわち、大東亜と言われた東アジア、東南アジアにおいて、欧米勢力を排除して日本が優位に立つ「大東亜新秩序」を建設するということが戦争目的だと、ここからは読み取れるでしょう。

そのような考え方を受けてでしょう。開戦前の11月20日には既に「南方占領地行政実施要領」が定められ、東南アジア地域における重要資源（石油、ゴム、錫、鉄、その他）の獲得、あるいは国防上の用地の日本による長期的な支配などが既に計画されております。しかし、これではあまりにも露骨な、侵略的な、帝国主義的な開戦目的というふうに見えます。

このような軍の計画について、11月2日、当時の東條英機首相は昭和天皇に拝謁し、この連絡会議の対米英開戦の結論を奏上し、説明したのだと思いますが、その際、天皇から東條首相に対してご下問がありました。天皇は、開戦の場合、日本の大義名分は一体どうするんだ、「如何に考うるや」と下問されますが、東條は困ってしまいます。大義名分はないのです。「目下研究中でありまして何れ奏上いたします」という非常にいいかげんな答えをしています。

先に戦争をすることを決め、その後になって何とか戦争を正当化できる理由、大義名分をつくり出さなければならないということで、政府、外務省などで考えます。その結果、使ったのが自衛戦争論でした。1928年に締結された「不戦条約」というのがあり、日本も加入しておりますが、それにより政治的な目的のための、国策の手段としての戦争が否定されています。そうした中で各国は自衛を名目として戦争を行ったりする。あるいは日本の場合、日中戦争は事変と称し、正式な戦争でないと言いました。こうして（対米英開戦を）自衛戦争として正当化しようとしています。

そこで、閣議で決定され、1941年12月8日、真珠湾、マラヤ、フィリピン、その他の攻撃後、開戦後に出された天皇による対米英宣戦の詔書では、アメリカ、イギリスなどは日本に対する経済封鎖などの圧迫をした。それは帝国の生存に重大なる脅威を与えた。それに対して、我が国はやむなく「自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破碎スルノ外ナキナリ」といって、戦争の正当化を図りました。

しかし、この自衛戦争論だけでなく、まだほかの言い方も出てきます。開戦直後の1942年1月21日、帝国議会における東條首相演説では、欧米帝国主義による長年の植民地支配からアジア諸民族を解放する、そして共存共栄のアジアをつくるという、ご存じの「大東亜共栄圏建設」という言い方が出ております。

このように、日本の太平洋戦争開戦の大義名分は不明確である、天皇が開戦前に疑問を呈せざるを得ないぐらいのものでした。表向きは自衛戦争論ということで押し切ろうとしますが、時々、アジア解放論も出てくるし、実際に軍部が狙っていたのは「大東亜」、すなわち東アジア、東南アジアにおける日本の覇権、とりわけ東南アジアにおける石油その他の重要資源だったというのが、先ほどご紹介した資料で明らかだと思います。

さて、戦争をするからには勝たねばいけません。日中戦争を続けつつ、さらに、対アメリカ、イギリス戦争もやろうと決めた軍首脳は、果たして戦争に勝つ見通しを持っていたのか。この点も非常にいいかげんでした。開戦前の大本営政府連絡会議あるいは御前会議においても、軍首脳は決して絶対に勝つという保証はできないと言います。しかし、このままでいると、じり貧になるのだ、だから戦うのだという、非常に無謀なプランでした。

そのような大義名分のない戦い、中国の昔の言い方で「無名の師」という言い方がありますが、そして勝算がない無謀な戦いによって、我が国では軍人・軍属230万、一般邦人80万、合計310万人という多くの犠牲者を出しております。ただ、その軍事・軍属の死者にしても、華々しく敵と戦って戦死というイメージのものではなく、より悲惨な死に方の者が多数であったというのが、今日の研究では明らかになっております。

日本軍事史の大家の秦郁彦先生のご研究によりますと、内地で亡くなった者を除き、外地で亡くなった軍人・軍属は210万人ほどですが、その3割ほどは広義の餓死者であり、栄養不足による戦病死なども含めて3割、60万人ほどは飢え死にでした。そのほか海没といって、輸送途上、船に乗っていて船が沈没し、死んだ者が40万人、飛行機が落ちて死んだという者が4万人と、ほぼ外地死者の半分ほどは戦闘

以外の原因で無駄に命を奪われています。それはあまりにもむなしい死に方でした。このように、アジア・太平洋戦争は非常に意味がない戦争だったというのが、私の報告の一つ目の点です。

次に、二つ目は資料紹介のようなもので、遠い戦場で学徒兵たちは何をしてたのかについてです。

戦争中、大量の兵力動員が行われましたが（表2）（38ページ）、人員が足りなくなったために大学など高等教育機関は縮小させられ、そして文科系の学生に対する徴兵猶予がなくなり、いわゆる学徒出陣が行われました。1943年から1944年の頃に出陣した学徒兵たちの行った先は、当時、戦争末期の軍隊の兵力配置が日本本土とその周辺の要地に置かれたために、フィリピン、沖縄本土などが多くなっており、しかし、これは時期によって相違しまして、より早い時期に召集された兵士たちは最初、中国に多く送られましたが、その後、太平洋戦争開戦後は「南洋」、東南アジアなどに送られ、それからフィリピン、沖縄など、そして最後は本土防衛につき込むという形で、学徒兵も含む日本軍の兵力配置は変化しています。

この戦争で戦った中央大学出身の学生たちの記録については、ご存じの『きけ わだつみのこえ』に2人の方の手記が収録されております。上村さんと大塚さんのものです。

それからまた、戦地で戦う中大出身兵士たちに大学から送った慰問品に対し、兵士から送られたはがきの返事が、『中央大学学報』に1939年初めに掲載され、さらに『中央大学百年史 資料編』にまとめられておりますので、それをもとにして、どういうところで中大出身の兵士たちが戦っていたのか、どういう挨拶を大学側に送ってきているのかを、レジュメ（36-37ページ）にまとめました。

これを見ますと、日中戦争の前期、在学学生も卒業したばかりの学生も含めて、中央大学の学生たちもやはり戦争に動員され、上海戦、南京攻略戦、武漢攻略戦といった主要な戦いに従事している。そして日本による主要な都市の攻撃、占領後も周辺地域におけるゲリラ戦など、中国側の抵抗が続きます。彼らは、これらに対する掃討戦、治安維持のための肅正戦などに従事しているというのがわかります。そして、治安維持のための戦いでは、相当の悲惨なことが行われたということ

が今日、明らかにされています。

最後に三つ目の「戦地中国の大学と学生たち」で、戦争の相手方となった中国で、皆様方と同じ世代の人たち、学生たちが何をしていたのか、外国の大学は戦争中どうであったのかということを紹介します。

中国の大学関係者、学生や教員などは国の未来を担う知識人といった意識が強く、非常に強いナショナリストでした。強い抗日意識を持っており、日中戦争開戦前から激しい反日運動をやっている。そして日中戦争が起きると、日本の支配のもとで暮らし学ぶことはできないというので、ある者は軍隊に入りますし、ある者は民衆を組織してゲリラ戦をやる等の活動を行いました。中国共産党の根拠地に行った人も多数いました。

しかし、その主流は、大学ごと全体として奥地の方に移り、そして日本と戦います。中国国民政府は奥地に拠点を移して、日本と8年間の長期抗戦を行ったのですが、同じように中国の主要な大学は奥地に疎開して戦い、学術、研究、教育を続けようとししました。

戦前、中国には108の高等教育機関があったといえます。その3分の2は沿岸地域に集中していました。そのうちの14の大学は重大な破壊を受けて再起不能となり、17ほどの大学は休校状態となりました。しかし、残りの77の大学、全体の3分の2以上は奥地に移転しています。有名なのは、北京大学、同じく北京の清華大学、それから天津にありました（これだけ私立ですが）南開大学です。この三つの大学が連合して、はるか西南の1,000キロ以上離れた湖南省の省都、長沙に連合大学をつくる。そして、その近くにも日本軍が迫ってきますとさらに西の方に移動しまして、雲南省（中国とミャンマー、ベトナムとの国境に近い方です）の昆明に西南連合大学をつくって、そこで研究、教育を続けました。合わせて2,600キロメートルの大移動でした（図1）（39ページ）。

中国では、当時、学生を日本のように徴兵して無理やり軍隊に入れることはありませんでした。学生が自発的に志願した「従軍運動」という例はありましたが、徴兵はありませんでした。むしろ、戦争というのは一時的なものであり、大学によって文化を長く保ち、伝える、中華の文化を戦争に破壊されずに伝えるということこそが、我々大学

人がなすべき使命であると考えて、大学での研究、教育を続けようとしていました。

長くなりましたが、最後に皆さん方、学生さん、また多くの方々へのメッセージです。

今回のシンポジウムに出席してくださった方々は、とりわけ戦争に関する関心があり、多くの知識を持っている方々だと思います。日本が再び戦争を起こさない、日本が巻き込まれない、若者たちが無理やり戦争に行かされ命を失ったりしないということも重要ですけれども、それだけでなく、多くの国民の、また海外の人たちの暮らしが戦災で破壊されないためには一体どうすればいいのかということ、歴史的な経験を踏まえて今後とも考えていっていただければと思います。

「過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目となる」という有名な言葉があります。歴史に学び、そして戦争をなくす、平和な世界をつくるために、私たちはますます研鑽を積んでいきたいと思っております。

ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)

#### ○松尾正人コーディネーター

土田先生、ありがとうございました。続きまして、大学史資料課から奥平晋さんが、中央大学の学徒出陣に関する新しい資料が出てきたということで紹介させていただくことになりました。

よろしく願いいたします。

# 「戦後 中央大学の戦没学生調査 -関係史料をめぐる-」

中央大学広報室大学史資料課嘱託  
奥平 晋

(当日紹介した資料は 40 ページに掲載)

ご紹介にあずかりました奥平と申します。

私の方は配布資料がございません。「戦後 70 年 - あらためて戦争と中央大学を考える -」展示図録に写真が 2 点あります (40-41 ページ)。細かい字で下の方にモザイクがかかっているものがありますが、「中央大学在学中 戦没者名簿」というのがございます。この作成目的としましては、1955 年、昭和 30 年ですが、この 11 月に開催の中央大学創立 70 周年記念事業の一環として、11 月 9 日に執り行われました慰霊祭ですね、亡くなった方々を弔う。その慰霊祭の基礎資料とすることを目的として作られたものようです。本学の戦没学生に関する調査資料としては、唯一の学内資料となっております。

写真をご覧になればおわかりになりますように、ここには、在学中に陸海軍に入り、戦死、あるいは戦傷病死した合計 401 名の学生の氏名を掲載しております。401 名という数値はちょっと少ないかなと思うのですが、戦没後に卒業認定された方々などはこの名簿からは除外されているようです。

当時の戦没学生の調査は、昭和 10 年から 20 年度、入学者の学籍簿を調査することから作業を始めたようです。ただし、今も少し数字に関して申し上げましたが、この 401 名をもって戦没者がすべてというわけではございませんで、まだその数値的な面に関しては全貌が明らかになっておりません。

そして、もうひとつの写真 (41 ページ) ですが、名簿を作るに際しましてベースとなった問い合わせの葉書ですね。各役場に問い合わせたものなのですが、最近これが、大学史資料課の方で再発見というか見つかりまして、現在、私はこの回答葉書と名簿の方の

照合作業をまた始めております。

最終的な目的というのは、中央大学から戦地に赴きました学生諸氏の全体像ですね。数値的な面も含めて、何人が戦場に征き、戻ってきた人もいるでしょうし、亡くなった人もいるでしょうし、その正確な数値をつかむことが今後の課題となるように思います。それが「学徒出陣」に関します全体像をつくり上げることに貢献するものと信じて、現在、仕事を進めている最中です。

短いですが、私の報告は以上となります。(拍手)

○松尾正人コーディネーター

戦没された方の資料を集めてくるという、なかなか地味な、大変な仕事的一端をご紹介させていただきました。

それでは、次の報告に移らせていただきます。

岡田大士先生から、「戦時体制下における理工科学校～中央大学理工学部へ」ということで、ご報告をお願いしたいと思います。

どうぞよろしく申し上げます。

# 「戦時体制下における理工科学校 ～中央大学理工学部へ」

中央大学法学部准教授  
岡田 大士

(当日配付の資料、投影資料は42ページに掲載)

法学部教員の岡田と申します。

私は、大学院時代に大学史を専攻していきまして、ちょうど第二次大戦前後の理工系教育をテーマにしておりました。そこで今回、このプロジェクトに参加させていただきまして、中央大学の理工系学校の当時の様子というお話をさせていただきたいと思います。

国は1942年5月9日、教育審議会をずっとやっていたんですけども一旦廃止して、5月21日に「大東亜建設ニ処スル文教政策」というものを出しました。私立学校は大学・高等学校・専門学校の新設を認めないというふうに制限をかけたんです。専門学校、これは今の職業人養成のための専門学校と性格がちよっと違って、どちらかというところは高専、工専と言っている、国立や公立の高等専門学校のイメージをしてみたら近いでしょう。

ただ、この発令に至る前に準備がされておりました、この間、廃止になりました教育審議会というものなんですけれども、そこでは我が国教育の内容及び制度の刷新、進行に関し、実施すべき方策如何ということで、高等教育に関する話が議論されているんですね。そこで言われているのは、国力の発展に対応していく工学部、理学部を拡充すべきだと言っているわけです。役所でいうと、商工省というところでも、工科系の拡充、職業本位の大学、研究専念の大学院、産学協同、こういうことを言われる。

1938年、これは国家総動員法が発動された年で、国家総動員法から発動されたことによる一番最初の命令だったらしいんですが、「学校卒業者使用制限令」というのがあります。これは何かというと、各企業は必要な理工系の学生の人数を出しなさいと。それで役所を通じ

て（ここでは厚生省なんです）卒業生を分配するという話なんですね。主には、機械、造船、航空、造兵、電機、応用化学、それから鉱山とか、金属を精製して取り出す冶金というやつですけれども、そういうことをやる学科については役所の方でも卒業生の割り当てをしますよということになるんですね。ここに至って、俄然、理工系の学校が目立っていきわけです。東京帝国大学は千葉に第二工学部というのをつくりまして、本郷の第一工学部とあわせて400人の定員となり、受け入れ人数が倍になっちゃったんです。それから官立商業学校、国公立の商業学校しかなかったところは工業学校をつくり、地方の工学部に今つながっていくわけですね。

そして72年前の今日壮行会が行われた学徒出陣のきっかけとして、1943年の10月2日「在学徴集延期臨時特例」をもって理工系・医学系・教員養成系を除く文系学生・生徒の徴兵猶予が停止されました。ですから、出陣しなさいということになるわけですね。理工系・医学系学生に関しては1943年11月13日、学徒出陣の翌月なんです、修学継続のための入営延期措置がとられます。これはどうなるかということ、徴兵検査はもうやりますよと。各地にあります部隊、そういうところへの配置はしませんよということで、理工系の学生に関しては延期が続くわけですね。

さらに「教育に関する戦時非常措置方策」、これが同じ月の10月12日に閣議決定されて、文科系の学部・予科定員を3分の1、専門学校定員を2分の1に減らしなさい。さらに11月になって、これはいよいよ現実味を帯びてくるわけですね。私立学校の整理及び統合が計画されます。「国民学校等戦時特例」というのがなかなかすごいんですが、文科系大学・専門学校を統廃合して理科系大学・専門学校へ統廃合しなさいと言うわけですね。

一番困るのは文科系の学部しか持っていない大学で、東京商科大学、今の一橋大学のことで当時はもちろん商業の学校なわけですが東京産業大学と名前を変えたり、私立大学では特に中央大学のようなところは大変なわけですね。それで卒業生が反対運動を随分やまして、一番効果があったのはやっぱり政府の内部です。枢密顧問官であった林頼三郎<sup>よしみち</sup>学長、それからその前学長の原嘉道です。原は当時、枢密院の

議長だったということもあって、この2人が何とか統合させないよう  
にということで頑張るわけです。そして、廃止ではなく公私立大学戦  
時措置委員会の審議形式に修正させます。ただ、人数を減らすという  
ところはなかなかひっくり返せなかったようで、大学としては経営も  
ありますし、そのためにというのが一番大きいんですが、私立学校に  
理工系学校を増設することになります。

スライド(50ページ)を見てみますと、法政、中央、立教、同志社、  
明治、青山、関西学院というのは、みんな1944年開校なんですね。  
一番大変なのは、青山学院、関東学院、明治学院で、これは三つ、明  
治学院に統合されてしまいました。一方で青山学院はこの時点で工業  
専門学校のみになったのです。立教大学は文学部を一旦閉じたそう  
です。ほかにも藤原工業大学、これは実は慶應のOBの藤原銀次郎とい  
う製紙会社の社長さんが寄付してつくった大学で、もともとその予定  
はあったらしいんですが、慶應義塾への合併、こういうものが行われ  
たりしていきます。

中央大学もこういう段階に来たので評議員会を開催して、まあ、テ  
ンボが早いんですね。1943年12月ですからね。そして暮れも押し迫っ  
た12月30日に文部省に認可申請を出します。そして3月13日に専  
門学校の設立が認可され、4月に中央工業専門学校が開校します。こ  
のタイミングで商学部・専門部(学部の下に商学科がありました)を  
募集停止して、在學生は経済学部に移すという措置をとります。

中央大学としては、実はパンフレット(44ページ)にあるんですが、  
1935年の創立50周年の時点で「工学部設置」という目標を掲げてい  
たんですね。ですので、ある意味で目標が一つ叶ったことにはなるわ  
けです。

それで、実際、じゃあどういふ人が教員だったかということですね。  
機械科・航空機科という二つの学科ができて、それぞれに定員が  
100人いました。機械科長は中尾金房というもと海軍機関少将です。  
海軍で浅間とか長門という、当時、戦艦、軍艦がりましたが、その  
機関長だったそうです。それから宮原旭です。日本小型飛行機と書い  
てありますけれども、グライダーをつくっている会社です。エンジン  
つきのグライダーをつくっている会社なんですが、その技術部長

だった方です。貴族院の議員だったので、恐らくは林頼三郎の関係で抜擢されたのでしょうか。

それで、200名に対して2,849人が出願して235人が合格。校舎は駿河台校舎ということになりましたが、実習施設がないものですから、機械科は新潟鐵工所の蒲田工場、それから航空機科は日本小型飛行機の府中工場で実習ということで、ほぼ実態としては勤労働員だったんじゃないかなと思います。

これは「中央大学新聞」に出てくるんですが、「この決戦下でありながら、諸君がなお父母の膝下より安んじて学校に通い、心身の錬磨、知識の修得にいそむことができるのは全くありがたい大御心おおみこころによるものであります」というふうに中尾機械科長が言っております。

さて、戦後ですけれども、これはどこの大学もそうなんですが航空機科は廃止されまして、中央の場合は「工業物理科」と名前を変えます。それから1949年に、いわゆる4年制の新制大学が始まりますが、そこではやっぱり工学部をつくりたいということで中央工業専門学校が廃止され、226名でまずは工学部が始まり、そして62年に理工学部になるわけです。

卒業生の進路について少し。卒業生名簿によると初年度は157人卒業したんですけれども、名簿を見ていると、新制や旧制の本学文科系への入学が目立つわけです。

ですから、これはいろいろ評価があると思うんですけれども、学徒出陣という状況においてどうやって生きていくかという選択肢の中で工業専門学校を選び、戦後、また本学の文科系に移っていったものと思われまます。

私からは以上です。(拍手)

#### ○松尾正人コーディネーター

それでは最後のご報告を総合政策学部の松野先生から、「元特攻志願兵の証言－中央大学と戦争－」というテーマでお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

# 「元特攻志願兵の証言－中央大学と戦争－」

中央大学総合政策学部教授  
松野 良一

(当日配付の資料は54ページに掲載)

皆さん、こんにちは。総合政策学部の松野でございます。

今までの講演は、中央大学と戦争に関する、過去にどういうことがあったかという振り返りでございますが、私のブロックは、この戦争の記憶をどうやって未来につないでいくかというテーマでございます。

私がこのテーマをやろうと思ったきっかけは、こうです。私はメディアリテラシーという授業を持っているんですが、その中で毎回感想をもらいます。非常に典型的な回答は、「日本が台湾や韓国を植民地統治していたことは知りませんでした」と。この感想で、歴史を、大体、縄文・弥生時代から、平安、鎌倉、江戸ぐらいまでは一生懸命やるんですが、その後はあまりやっていないということがよくわかります。

さらに、「日本が真珠湾を攻撃したからアメリカとの戦争が始まったと思っていました」と。つまり、先ほど土田先生の説明がありましたけれども、日中戦争の部分が欠落してまして、いきなり真珠湾攻撃で太平洋戦争が起きたと思っている。

さらに、こういうのがあります。「日本がアメリカと戦争をしてたなんて初めて知りました。びっくりです」って、こっちがびっくりですって言いたいぐらいです。最近の朝ドラのヒロインの言葉を使えば、もう「びっくりぼんや」という感じでしょうかね。ここはちょっと笑っていただくといいんですけどね。(笑声)ごくごく少数ですが、もうこういう感想がでてきている状態なんです。

どうも若い世代に、戦争が伝わらなくなってきた。修学旅行などで平和学習に行く生徒や学生たちの興味は、つらく重たい戦争体験者の話よりはエンターテインメントに傾きがちです。これもよく話を聞くんですが、広島に修学旅行に行く場合は必ず広島のお好み焼きツアーを入れなければいけない。さらに、長崎に行く中学生はハウステンボ

スも経由しなければいけない。東京大空襲についてですが、東京に来る修学旅行生は必ずディズニーランドへ行く。それから、これはうちのゼミの話でございますが、沖縄の地上戦の話を取材に行く場合は、海岸でのバーベキューが必ず入ってきます。どうも戦跡よりもエンターテインメントに流されがちです。

先ほど土田先生もおっしゃっていましたが、歴史の視点が養われていない。小中高と、最初のペリー来航から真珠湾攻撃に至るまで、どうもこの辺、近現代史をしっかりと教えられていない。因果関係で歴史が連続しているんだということをしっかりと理解できていない。

昔の軍歌の中に、「大東亜の平和のために」などという歌詞があります。つまり、平和のために戦争をしていた。そして、その辺から結果的にどうなっていったのかという連続性、どうもそこが欠落しているということでございます。平和な今の若い世代と戦争の時代の戦争体験者の回路が、この時代になって、うまくつながっていない。ちょうど私とか、先ほど話がありました廣岡先生の時代は親が体験しているので大体聞いております。けれども、今の学生は「戦争を知らない子供たち」という歌がありました。それを歌っていた世代よりもっと若い世代が親になっているので、もちろんもうわからない。ほとんど、戦争の記憶をつなぐリアルな回路がなくなっているという状態でございます。

学生がよく言うのは、「戦争はもう遠い過去の出来事だ」と。リアルな感覚がなく、記憶に残らない。だから、幾ら話しても伝わらないということですね。

いろいろ考えた結果、私のゼミでは「取材」という手法を取り入れました。学生が、自らの取材体験を活字と映像で表現するという活動を今やっております。つまり、戦争体験者や語り部の話を聞くだけではなく、逆に学生が取材をして一人称で表現するという方法です。大学の中にいますと、サークル棟と食堂と教室を行ったり来たりで4年間が終わってしまいます。あとちょっとボランティアとアルバイト。それだとなかなか人間的に成長しない。なので、外に出て行って、こういうフィールドスタディ、あるいはPBLですね。最近プロジェクトを行って学修する。そして、そのアウトプットを残していこうと

いう計画を立ち上げました。

一つは、『戦争を生きた先輩たち』というプロジェクトでございます。これは2007年に、あるゼミ生が、(今なぜか吉本興業のマネージャーをやっておりますが、)江田島の資料館に行きまして、そこに昔の軍艦のデッキが再現してあるらしいんですが、その上に立っていたところ、ああ、自分が昔、学生だったら、きっと自分も戦争に行っていたなど。沖縄に、水上特攻で向かっている戦艦大和のデッキの上にもいたかもしれないなあ、と彼がブログで書いていました。じゃあ、ゼミでこれをやろうじゃないかと。特に中央大学は数多くの先輩たちが戦争を体験し、かつ、戦死されております。生き残った方、遺族の方を含めて、まとめて取材して、ルポルタージュ形式で書こうと。つまり一人称で書いて、この本を読んでもくれる若い人たち、学生さんにも追体験してもらおうという企画を思いつきました。学生たちは五感をフルに使ってルポルタージュを書き、本としてまとめました。2007年から2015年まで、8年がかりで46名の方にインタビューし、これは今、2巻が出ていますが、今度3巻目が出る予定でございます。

2015年になりまして、これを活字だけでなく映像で残そうというプロジェクトを立ち上げました。現在、進んでいるんですけども、この1巻目に登場されている方がかなり難しい状況です。この1巻の方でこれだけたくさんいらっしゃるんですが、わずか2名が可能。ほかの方は死亡されたか体調不良でもうインタビューができない状態でございます。2巻目は1人、3巻目はまだ何人かお元気でいらっしゃいますので、できれば10名ぐらい、動画によるアーカイブ化を目指したいと考えております。

では、最近制作した1本のドキュメンタリーを、まずご覧いただきたいと思っております。

〔動画上映〕（約 10 分）

「元特攻志願兵の証言－中央大学と戦争－」

この映像は、特攻隊に志願した中央大学 OB（戦争を生きた先輩）をゼミ生が訪ね、志願したときの思い、戦場での経験、終戦後の復員、死んでいった仲間への思いなどを聞くドキュメント。

先輩は、「死の瞬間をどのような形で迎えるかということを考えて。徴兵検査で歩兵として行って死ぬくらいなら、特攻隊で死にたいと思った。撃たれるのを待っているのではなく、自分からぶち当たる。その方が男らしいと考えた。その方がよいと思った」と語る。

また、自らが戦争体験の語り部となったことについて、こう話す。

「亡くなった特攻隊の仲間にしりぞけないと思いつけてきた。若い人がこのような歴史を勉強することで、本当の戦争のことを知ってほしいと思い、これまで語り部をしてきた」。

そして最後に、平和について、「自分の親兄弟、恋人、また国のため、日本人のためと思って特攻隊に行ったけれど、考えてみれば、本音はもう特攻隊なんか行かないような平和を求めている、というのが本心」と語る。

この映像は下記のサイトで視聴することができます。

[http://www.tamatan.tv/archives/20150901\\_post-14/](http://www.tamatan.tv/archives/20150901_post-14/)

- 松野教授 私がここで何やかやと語るより、これを実際に取材して編集した経済学部の名越君なごしが来ておりますので、ちょっと感想を聞いてみたいと思います。

一言、自己紹介を。

- 名越ひろやす（中央大学経済学部3年） 恐れ入ります。経済学部3年の名越大耕ひろやすと申します。よろしくお願ひいたします。

- 松野教授 この神原さんは、徴兵され歩兵になれば玉砕になる、それなら特攻隊に志願しようと。まあ、逃げ場がないわけですね。当時、中央大学には有名な哲学の先生が何人かいらっしやったそうなんですが、その哲学の先生に「私はどうすればいいんだ」というふ

うに答えを求めたら、哲学の先生も「わからん」というふうに答えたらしいです。それで、どうすることもできず、どうせ死ぬなら潔く散ろうと思い、彼は自ら特攻隊を志願したということを語っておられます。

これはちょっと10分に縮めたのであまりよくわからないと思いますが、長編のインタビュー中にはそういう内容も入っております。

まず最初に、取材した率直な感想はいかがですか。

- 名越 卒業から70年近く経つにもかかわらず、皆さん中央大学に誇りや思い入れが強くあるなあということを第一に感じました。ある方は、徴兵延期をしてもらい、勉強をすることができたから感謝している。ある方は、尊敬する父と同じ大学で勉強することができたことに感謝しているということをおっしゃっていました。

そして、我々在学生に対して、いろいろな形で現在も応援してくれています。今回の取材も、我々への応援の一つではないかなという感じました。

今回の取材を通して、今このような活動ができているのも、戦争を経験した中大の先輩方がいるからこそであると思いました。

- 松野教授 あなたは今、この動画のプロジェクトのリーダーをやっているんですけど、活字はオーケーだけど動画で撮られるのは嫌だとか、あるいはもう年だから嫌だというふうに拒否された方もたくさんいらっしゃると思います。しかし、そういう拒否されている方が最後には、「まあ、いいよ」というふうに言うてくださった理由は何でしょう。

- 名越 第一に、中央大学の後輩だからということをおっしゃってありました。今回、取材した方々は、皆、90歳を超える方々でしたので、最初に取材を依頼したときには体力的に厳しいとおっしゃっていましたが、すぐに二言目には、「中央大学の後輩の頼みなら断ることはできない」とおっしゃっていただきました。

今回の取材で、中央大学の先輩・後輩という細い糸のつながりを感じまして、これからもこのつながりを大切にしていきたいなと感じました。

- 松野教授 最後にちょっと聞きたいんですけども、名越さん、あ

なた本人がこの取材をして、取材する前の名越と取材後の名越では、何か変わったところはあるんですか。

- 名越 戦争への意識が大きく変わりました。今回の映像でもわかるように、今の私と同年齢で特攻隊に行った方のお話は、ほかの戦争の体験者のお話よりも身近に感じることができました。この神原さんの「私と同じような経験をしてほしくない」という言葉は、まさに戦争の悲惨さを物語っているのかなと思います。

また、戦争を知らない自分が、今後、戦争を二度と起こさせないために何ができるかということを考えてところ、戦争経験者の方のお話を伺い、それを通じて戦争をよく理解し、それを後世に受け継いでいくことが自分にもできることではないかなと感じました。

今回の取材で、戦争を知るということが何よりも重要なのではないかなと感じました。

- 松野教授 中央大学は今年 130 周年なんですけど、中央大学に入って改めて中央大学について見直した - という表現はちょっとおかしいですけど、どうですか。

- 名越 自分が中央大学の学生であることをもっと誇りに思うべきなのかなと。先輩方がそうおっしゃっておりますし、中央大学で勉強できるという喜びを噛みしめて、これからも勉強していきたいと思えます。

- 松野教授 ありがとうございます。

私の言いたいことを全部彼が言ってくれましたし、時間ですので、これで終わらせていただきたいと思えます。

どうもありがとうございました。(拍手)

## 質疑

○松尾コーディネーター 松野先生、どうもありがとうございます。

実は、時間が押してきて少し難しいんですが、シンポジウムでございまして、最後にご報告をいただいた方にちょっと前に来ていただいて、質問・質疑応答をさせていただきたいと思います。

それでは、どうでしょうか。順番を追ってというわけには、ちょっと時間が難しいものですから、今回のパネラー、報告していただいた方にご質問・ご意見等がありましたら、まず手を挙げていただいて、そしてできるだけ多くの方にとっております。

どうでしょうか、ご質問なりご意見なり。

はい、どうぞ。

○質問者1 松野先生にご質問させていただきます。

先ほどの証言のビデオ、プロジェクトがあるということなんですけど、2点あるんですが、1点は現在の進捗状況、2点目が、今後、公開とかはどのような方法を考えておられるのか、お教えいただけますか。

○松野総合政策学部教授 現在、3名の方は了承をとりまして、既に撮影は終わっています。これから、あと残り、ちょうど1巻、2巻とありましたけれども、3巻目の内容について、朝鮮、台湾、学徒兵を含めて残り7名ぐらいを撮影し、合計10名ぐらいを目指したいと思っております。

あとアウトプットのやり方でございますが、一つは、放送です。多摩地区を初めとして、現在この10分バージョンは全国のケーブルテレビ、270万世帯で流れております。及び、ウェブ上でも配信されております。これは「多摩探検隊」というサイトで視聴できます。「多摩探検隊」で検索していただくと、その中に今の神原さんのものもアップされております。

今後、順番に制作してWeb上にアップしていきます。まとめて、「中央大学と戦争」というタイトルをつけて、10本アーカイブできるように、今目指しております。

○松尾コーディネーター ほかにいかがでしょうか。

では、どうぞ。

○質問者2 なぜ、日本の戦争の歴史を教育現場で子供たちに教えることなかったかということが一つ問題じゃないかと思うんです。そのことに関して、先生方はどのような感想を持っていますか。このような戦争があったという事実を、今後、教育現場の方で子供たちに語っていくということはできますかね。

学生さんたちが、ほとんど太平洋戦争のことすら知らないんですよ。アメリカと戦争したことさえ知らないという、このあまりの戦争に対する無知さ。これは大人の責任、あと教育の責任ではないですか。

○松尾コーディネーター 大変難しいご質問ですが、報告者の方の中で、どうでしょうか、今の点について何か。土田先生、いかがですか。

○土田経済学部教授 おっしゃるとおり、教育に責任があるというのは事実だと思います。

アメリカと戦争があった、あるいは中国と戦争を行った、そして多くの犠牲者を出したということは、それこそ中学・高校の歴史の教科書にも書いてあることで、学校で教えているはずですが、また私もアジア史という授業を担当しておりますが、大学でも歴史関係の授業では話しております。

ただし、教員が教える内容が、必ずしも生徒たち、学生たちの中に十分定着していないということに問題があると思います。それは、ただ学校の先生だけが取り組み、単に事項として、何年に何戦争がありました、何年に何とか事件があったという、それだけを覚えるというだけではだめで、そうすると、授業が終わる、試験が終わると、すぐ学生、生徒たちは忘れてしまいます。やはり社会全体として戦争の経験を語り継ぐ、そしてそれを今に生かし、将来につなげていくということが必要だと思います。

そういうことからいいますと、日本の社会というのは過去のこと、とりわけあまりよくない思い出、嫌なことは早く忘れようという昔からの風潮があり、そしてまた戦争を経験した世代も、今回、松野

先生と学生さんが紹介してくださったように、その記憶を語り継いでくださる方は非常にありがたいのですが、実はあまりにもつらい経験であるがゆえに、それを語らない、言わない人というのめかなりおります。そのように考えております。

私たち大学の教員としても、さらに努力していかなければいけないと思っております。

ご指摘ありがとうございました。

- 松野総合政策学部教授 まさにおっしゃるとおりでございます。ペリー来航の付近はまだわかっているんですけど、その後、なぜ知識が欠落しているのかをアンケートでとったことがあるんですが、一つは、入試に出ないのであとは読んでおいてって先生に言われました、というのが一番多いんですね。入試に出ないから教えていない、あるいは、学んだけれどもみんなその辺は記憶が定かじゃなくなる。

そうなりますと、大学へ入ってきた学生に、少なくともペリー来航から現在に至るまで、近現代史を再度教える必要があるのではないかと。もう既に戦後70年でございますので、戦後史も同様、いわゆるアメリカの進駐軍がやって来たその後の歴史も含めて何がしかの歴史教育は大学でちゃんとやるべきだというふうに私は思いますし、私自身も試みているということでございます。

ありがとうございました。

- 岡田法学部准教授 多分、このプロジェクトの一つのベースだと思うんですけども、中央大学では「中央大学と近現代の日本」という講義をやっておりまして、それは単純に中央大学の歴史をやるだけではなくて、そこには日本の、特に130年というのは明治から大正、昭和、それから平成に至る歴史というのもありますから、単純に中央大学の歴史だけではなくて、その近現代の日本、その展開と結びつけて講義をするようなことをしております。

引き続き、ご支援をいただけたらと思います。

- 松尾コーディネーター 中央大学の入試では歴史も近代史も出題はしておりますので、一言申し上げたいと思います。

それでは、時間がオーバーして、司会の不手際で、まだまだお話

しされたい方もいらっしゃったかと思いますが、これで終わりにさせていただきたいと思います。

パネラーの皆さん、どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、最後に中島法学部長からご挨拶をさせていただくことにいたします。

○中島法学部長（総合司会）

時間の制約で質問を限らせていただきましたことをお詫び申し上げます。

中央大学の教育研究活動の一端を皆様にも知っていただけたのではないかと考えております。最後のご質問で頂戴いたしましたように、日本、世界の近現代史と中央大学の歴史が重なってございます。

今後もこのような企画、あるいは地道な教育研究活動を通じまして、戦争の経験・体験というものを、後世、若い世代に語り継ぐような形の取り組みを今後も積極的に取り組んでまいりたいと存じます。

本日はお忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。(拍手)

— 了 —

配布資料、投影資料

「アジア太平洋戦争と大学」 （土田 哲夫） .....	32
「戦後 中央大学の戦没学生調査－関係史料をめぐって－」 （奥平 晋） .....	40
「戦時体制下における理工科学学校～中央大学工学部へ」 （岡田 大士） .....	42
「元特攻志願兵の証言－中央大学と戦争－」 （松野 良一） .....	54

# アジア太平洋戦争と大学

2015.10.21 土田哲夫（経済学部）

## はじめに

- ・ 2015.8.14 安倍晋三首相 戦後 70 周年談話

国内外の戦没者に「痛惜の念」、「哀悼の意」を表明。同胞 300 万のほか、交戦国の若者、中国・東南アジア・太平洋の島々等戦場となった地域の無辜の民の被害にも言及。

- ・ 大学・学生はどう戦争にまきこまれたか

参照：『戦後 70 周年記念講演会「戦中・戦後の中央大学」』（2015.7.8 菅原彬洲先生講演）

## 1. あの戦争は何だったのか

- ・ 「先の大戦」とは？

「アジア[・]太平洋戦争」：日中戦争（1937.7-）・太平洋戦争（1941.12-）全体を包括

- ・ 何のための戦いだったのか？

日中戦争 1937.7.7 局地衝突→拡大→全面戦争／外交（和平工作）交錯

・対米英開戦の理由の不明

1941.11.2 大本営政府連絡会議決定「帝国国策遂行要領」：帝国の「自存自衛ヲ全フシ大東亜ノ新秩序ヲ建設スル為」開戦。11.20 「南方占領地行政実施要領」

1941.11.2 昭和天皇「大義名分ヲ如何ニ考ウルヤ」東條首相「目下研究中」

1941.12.8 「宣戦の詔書」米英の「帝国ノ生存ニ重大ナル脅威」のため、やむなく「自存自衛ノ為蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破碎スルノ外ナキナリ」

1942.1.21 帝国議会における東條首相演説：「大東亜共栄圏建設」

・開戦から終結に至る計画

1941.11.15 大本営政府連絡会議決定「対米英蔣戦争終末促進に関する腹案」

・日本・諸外国の戦争被害

→表 1

## 2. 遠い戦場で学徒兵たちは

・戦争拡大と兵力動員

→表 2

教育期間縮小、文科系学生徴兵猶予廃止→ 1943.10 「学徒出陣」(狭義)

学徒出身下士官・将校の死亡率>職業軍人

陸軍兵力の地域別配置 中国 2/3 以上→ 1942- 南洋重点→ 1945 本土防衛

・戦争末期

日本戦没学生記念会編『きけ わだつみのこえ』（岩波文庫、1995）に中大出身者2名の手記収録

※『図説中央大学 1885 ⇒ 1985』に写真と資料画像

- ①上村元太 三重県 1912 生、42 中大専門部法科卒・同大学経済学部入学、43.1 入営、45.4 沖縄首里にて戦死、24 歳。1943/6/19-7/26 手記（61-68 頁）
- ②大塚晟夫 東京都 1912 生、中大専門部、43.12 海軍入団、45.4.28 沖縄嘉手納沖で戦死、23 歳。1945/4/21,25,28 手記（263-7 頁）

-34-

兵士たちは犠牲者か加害者か？

個々の情況、軍機構の一員、交戦相手・外征・占領支配

・日中戦争期

川島正（東京農大卒、1940.12 入営、45 華中で戦死、29 歳）同書 27-28 頁  
1943.1/31,2/1 手記収録。

・日中戦争期中大出身兵士たち（16 名、手紙 18 通）1939 初  
駐屯地：満洲 2、華北・華中 12、華南 1、不明 1

→資料 1

### 3. 戦地中国の大学と学生たち

- ・大学関係者（学生・知識人）：ナショナリズムの担い手 強い抗日意識
- ・戦争による大学の破壊：南開大学、復旦大学
- ・「大学の長征」  
中央大学（南京） → 重慶 1550km  
北京大学・清華大学（北京） + 南開大学（天津） → 長沙連合大学 → 西南連合大学（昆明） 2600km
- ・日本占領地残留組 → 周作人など戦後「漢奸」裁判に

→ 図 1

#### 【参考文献】

- 中央大学百年史編集委員会編『中央大学百年史資料編』中央大学、2005年  
同編『図説中央大学 1885 ⇒ 1985』中央大学、1985年  
外務省編『日本外交年表並主要文書』原書房、上・下、1965-66年  
日本戦没学生記念会編『きけ わだつみのこえ 日本戦没学生の手記』岩波文庫、1995年  
白井厚編『大学とアジア太平洋戦争』日本経済評論社、1996年  
蜷川寿恵『学徒出陣—戦争と青春』吉川弘文館、1998年  
吉田裕『アジア・太平洋戦争』岩波新書、シリーズ日本近現代史⑥、2007年

## 資料1 「戦線より母校中大の発展を祈る」(1)(2)

『中央大学学報』第11巻第6号、第12巻第1号（『中央大学百年史資料編』372-385頁）

### (1) (1939年5月)

- ①田中富太郎 1938 秋、武漢攻略参加、「漢口一番乗の光栄」、華中に駐屯警備
- ②梅本林太郎 1938 秋、広東攻略戦参加、年末また華北帰還、「共産系支那軍」掃討戦に従事
- ③加藤慶作「中支の野に残敵討掃の任務に邁進」
- ④西竹知夫 北満ハイラル駐屯満州国西部国境警備
- ⑤村井八東「母国出征以来約半年日夜戦闘に従事」
- ⑥喜多村進「昨年支那大陸に第一歩を印してより早一年」、漢口作戦に参加、「国際都市」〔上海〕帰還後、〔寧波〕で下士哨勤務
- ⑦岩戸清 北支○○県城駐屯。「嚴寒」の中、「日に夜を次いでの長行軍、追撃戦払暁攻撃」の辛苦を嘗め、「幾多の戦友を失」った
- ⑧岩本庵 夜間部二年商学部。1938.1 入営。38 秋大阪出港、塘沽に上陸、ついで江蘇省徐州に駐屯し「其四周の肅正行動に従軍」、本春その西方帰徳で警備任務。
- ⑨小林今一「入校以来一年にして応召の身となり、勉学の途上たりし小生は些か二ツの道に当惑致し候も」「日夜頑健にて軍務に精勤」、武漢陥落後も「敗残兵の掃蕩に、治安肅正に益々皇軍の威武を必要とするが如き現狀に、進撃々々の小生等はもとより生還を期せざるも」……
- ⑩西原正「零下四十五度位迄下つた」〔満洲〕駐屯。籠球会メンバー〔在学二年で応召〕

- ⑪渡邊良祝 1938.1 応召、38.9 中国に「上陸以来転戦亦転戦」「大陸支那の一角……巡察の一時、目のあたり見る敗戦国の姿、思は遠く故里に」
- ⑫綾部康生 1937 夜間部法学専門部に入学、同7月出征、停学。「第一戦にありて、警備に当り無事軍務精勤」、「一年有半、北支に、南京に武漢攻撃に幾多の勝利を得……」
- ⑬望月誠三郎 38.8 より武漢攻略戦従事。丸山部隊。目下、漢口の西北に駐軍警備。

\* (2) (1939年5月)

- ⑭小林致「十二年九月呉淞に敵前上陸をなし上海市封鎖亦大場鎮陥落に亦是南京攻略戦に」従事。華中、大別山山系を望む地に駐屯。
- ⑮西竹知夫 (=④)「応召以来既に一年、四月一日を以て上等兵」
- ⑯及川善兵衛「今や北支の和平は名実共に確立し……凱旋の日も決して遠からざるものと思ひ居り候」
- ⑰岩戸清 (=⑦) 河北省〇〇市駐屯。「黄塵万丈」「かつては戦友が血と汗とで乗つ取つて呉れた田畑にも、今は麦がすく〜と成長」
- ⑱大島久三郎 1938.10 広東攻略参加、「攻略当初は至極殺風景な戦場風景であつた当市〔広州〕も今復興の途上にあり世界に冠たる空爆の跡も殆ど清掃せられ軒並には日章旗や五色旗が掲げられ」……「戦地に参り感ぜられる事は戦争には何うしても負けられぬ事、戦敗国のみじめさつく〜胸を突き」

表1 第二次世界大戦の主要国における兵力と戦費、  
戦死者数の比較

	戦費 (億ドル)	兵力 (万人)	戦死兵 (万人)	傷病兵 (万人)	民間死者 (万人)	総戦死者 (万人)
米 国	2880	1236	29.2	67.1		
イギリス		468	30.6	28.1	6	36.6
ソ 連	930	1250	1360	500	772	2132
中 国	490	500	132.4	176.2	1000	1132.4
主要連合国合計		3454	1552.2	771.4	1778	3301
日 本	412	609	230		80	310
ド イ ツ	2123	1000	330		289.3	619.3
イタリア	210	450	26.2	12	9.3	35.5
主要枢軸国合計	2745	2059	586.2		378.6	964.8
交戦国総計			2357	1026.4	3116.4	5473.4
第一次大戦			802	2122.8	664.2	1466

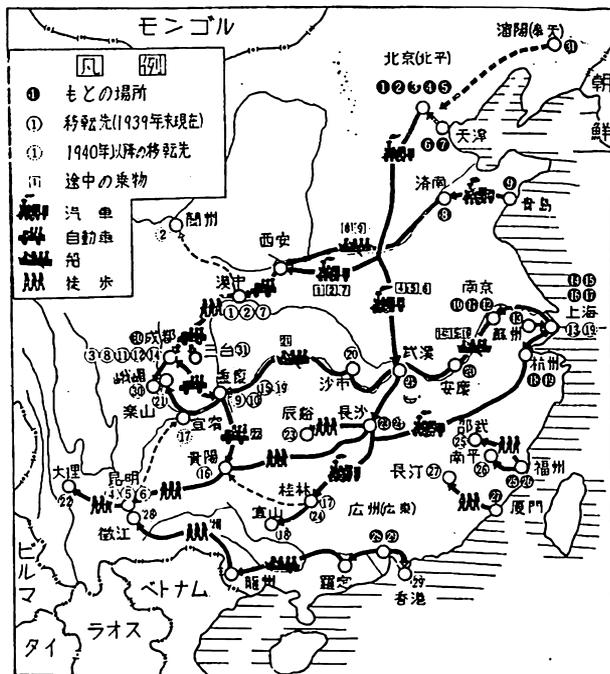
表2 兵力動員と戦死者 (単位万人)

年次	動員総数	対男子人口比	戦死者数
1937	107.8	3.10%	1.2
1938	128.9	3.70%	4.9
1939	141.9	4.00%	4.2
1940	168.3	4.80%	3.3
1941	239.1	6.90%	2.8
1942	280.9	8.10%	6.6
1943	337.5	9.70%	10.0
1944	503.9	14.60%	14.6
1945	696.3	20.50%	112.7

出所：表1 油井大三郎「世界戦争の中のアジア・太平洋戦争」『岩波講座アジア・太平洋戦争1』2005年、261頁。

表2 原朗「戦時統制経済の開始」『岩波講座日本歴史20』岩波書店、1976年

図1 戦時下中国の大学の長征

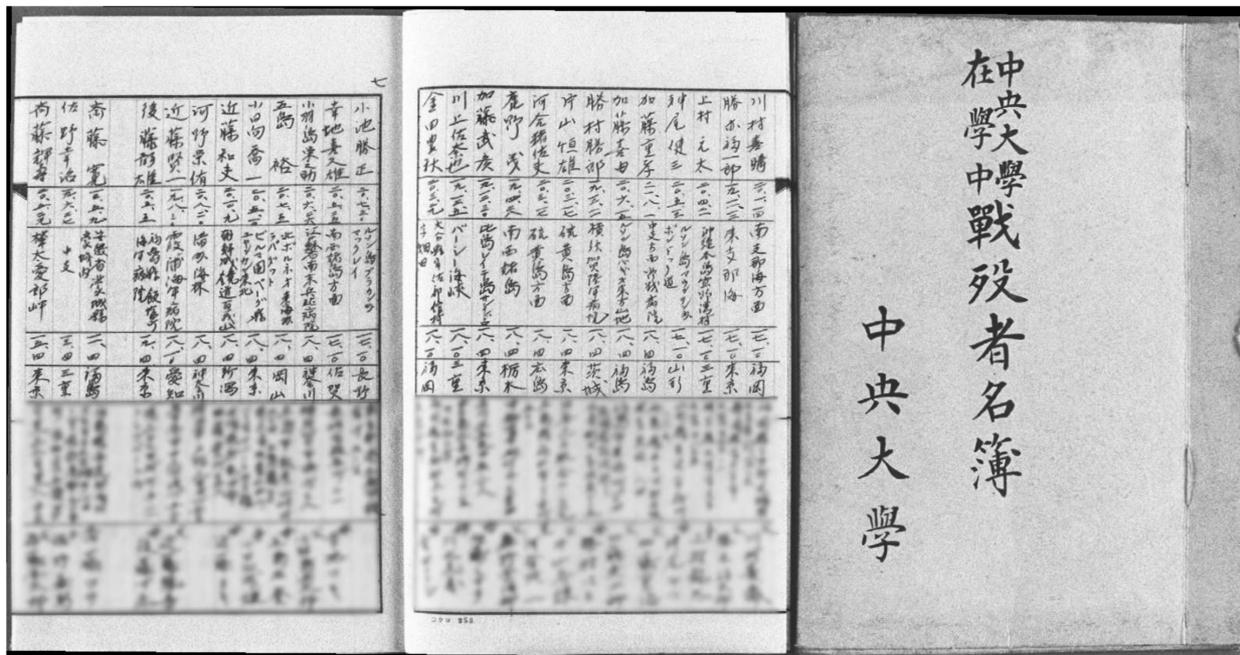


\*注

- ②北平師範大学
- ④北京大学
- ⑤清華大学
- ⑥南開大学
- ⑨山東大学
- ⑩中央大学
- ⑪金陵大学
- ⑮復旦大学
- ⑱浙江大学
- ⑳武汉大学
- ㉘中山大学
- ㉛東北大学

出所:「流亡の大学」『中国』59(1968.10),15頁。Hubert Freyn, *Chinese Education in the War* (Shanghai, 1940) 所載原図(一部補足したもの)。

「戦後 中央大学の戦没学生調査 -関係史料をめぐって-」(中央大学大学史資料課嘱託 奥平 晋)



「中央大学在学中 戦没者名簿」(1955年)



中央大学が実施した在学戦没学生調査の際の役所からの返信葉書（1954年）

# 2015年10月21日「戦争と中央大学」シンポジウム

## 戦時体制下における理工科学校～中央大学理工学部へ

岡田 大士（法学部准教授）

### 1. 国の施策（～1942）

1942年5月9日教育審議会の廃止、5月21日「大東亜建設ニ処スル文教政策」

→私立学校は大学・高等学校・専門学校の新設を認めない

（ただし理工系学校の拡充は制限しない）

※実はそれ以前から準備がされていた

#### ●各学校の対応

1942年 東京帝国大学：千葉県に第二工学部を設置

1942年 航空科学専門学校の設置（のちの東海大学工学部）

地方における工業専門学校の整備→戦後地方国立大学工学部の母体に

### 2. 1943年以降の国の施策

#### ●1943年10月2日「在学徴集延期臨時特例」

理工系・教員養成系・医科系を除く文系学生・生徒の徴兵猶予停止→「学徒出陣」

1943年11月13日

「修学継続ノ為ノ入営延期措置」理工系学生への入営延期

- 1943年10月12日「教育ニ関スル戦時非常措置方策」  
文部省「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク学校整備要領」  
文科系大学の学部・予科定員を三分の一、専門学校定員を二分の一に削減  
文科系大学・専門学校を統廃合して理科系大学・専門学校へ統廃合  
さらに11月「国民学校等戦時特例」を提示→私立学校の「整理及統合」を計画

- 戦時非常措置方策に基づく対応  
1944年官立商業学校の工業学校化（高岡・和歌山・彦根）  
東京商科大学（現一橋大学）を東京産業大学へ名称変更  
藤原工業大学と慶応義塾大学の合併  
青山学院・明治学院・関東学院の文系学部は明治学院に統合

### 3. 本学の対応

- 戦時非常措置方策に対する本学関係者による反対運動  
野村嘉六（東京法学院卒・元文部政務次官）による運動  
枢密顧問官であった林頼三郎学長、原嘉道前学長（いずれも当時）

→「公私立大学戦時措置委員会」による審議形式に修正させる  
以後、私立学校（特に法律学校系）に理工系学校が増設される

●中央工業専門学校の設置

1943年12月24日 評議員会を開催（寄附行為改正の件）

12月30日 中央工業専門学校設立認可申請（入学定員・機械科100人、航空機科100人）

1944年3月13日 中央工業専門学校設立認可

4月1日 中央工業専門学校開校（校長：林頼三郎）

（同日 商学部・専門部商学科募集停止、商学部在学学生を経済学部に移籍）

機械科長：中尾金房（元海軍大学校教官）

航空機科長：宮原旭（日本小型飛行機技術部長）

各学科1学年100名3年までで合計600名 200名に対し2849名が出願、235名合格。

校舎は駿河台校舎ただし実験・実習施設がない

→新潟鐵工所蒲田工場（JR蒲田駅そば）・日本小型飛行機府中工場（府中刑務所そば）で実習

実は60周年記念事業の一環として「工学部設置」が掲げられていた

1935年（創立50周年）「來ルヘキ十年ノ記念事業トシテ完全ナル工学部ヲ増設」

## 4. 戦後

### ●戦時体制の払しょく

航空機科→工業物理科

1949年4年制「新制大学」制度が始まる→新制大学移行を機に工学部に改編する動き

1949年 新制中央大学工学部の設置

土木工学科、精密工学科、電気工学科、工業化学科、一般教養の定員226名で開始

中央工業専門学校は廃止

1962年4月、理工学部へ

### ●卒業生の進路

初年度入学者→157人が1947年に卒業

『中央大学学員名簿』→新制・旧制の本学文科系への入学が目立つ

# 戦時体制下における理工科学校～ 中央大学理工学部へ

岡田大士(法学部准教授)

1

## 理工系学校の増加

- 1942年5月9日教育審議会の廃止、  
5月21日  
「大東亜建設ニ処スル文教政策」
  - 私立学校は  
大学・高等学校・専門学校の新設を認めない  
(ただし理工系学校の拡充は制限しない)

2

## 実はそれ以前から準備がされていた

- 1937年12月に教育審議会が設置
  - 「我国教育ノ内容及ビ制度ノ刷新進行ニ関シ実施スベキ方策如何」1940「高等教育ニ関スル件」
  - 「国力ノ発展ニ即納シテ工学部、理学部等」を拡充
- 商工省生産管理委員会報告(1938)
  - 工科系の拡充、職業本位の大学、研究専念の大学院、産学共同
- 1938年学校卒業生使用制限令  
(国家総動員法発動による)

3

## 各学校の対応

- 1942年 東京帝国大学「第二工学部」
  - 1938 海軍造船中将の平賀譲が学長に「軍艦総長」
  - 1942 千葉県に第二工学部を設置
  - 東京・本郷の「第一工学部」とは成績で振り分け
- 1942 航空科学専門学校の設置
  - のちの東海大学工学部
- 地方における工業専門学校の整備
  - 戦後地方国立大学工学部の母体に

4

1943年10月2日  
「在学徴集延期臨時特例」

- 理工系・教員養成系・医科系を除く  
文系学生・生徒の徴兵猶予停止  
→「学徒出陣」
- 理工系学生への入営延期
  - 1943年11月13日  
「修学継続ノ為ノ入営延期措置」  
徴兵検査のみ行われる

5

1943年10月12日  
「教育ニ関スル戦時非常措置方策」

- 文部省  
「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ基ク学校整備要領」
  - 文科系大学の学部・予科定員を三分の一、専門学校定員を二分の一に削減
  - 文科系大学・専門学校を統廃合して理科系大学・専門学校へ統廃合
- さらに11月「国民学校等戦時特例」を提示  
→私立学校の「整理及統合」を計画

6

## 戦時非常措置方策に基づく対応

- 1944年
  - 官立商業学校の工業学校化(高岡・和歌山・彦根)
  - 東京商科大学(現 一橋大学)を  
東京産業大学へ名称変更
  - 藤原工業大学と慶応義塾大学の合併
  - 青山学院・明治学院・関東学院の文系学部は  
明治学院に統合

7

## 本学の対応

- 本学関係者による反対運動
  - 野村嘉六  
(東京法学院卒・元文部政務次官)による運動
  - 枢密顧問官であった  
林頼三郎学長、原嘉道前学長(いずれも当時)  
→「公私立大学戦時措置委員会」による  
審議形式に修正させる
- 以後、私立学校(特に法律学校系)に  
理工系学校が増設される

8

## この時代に設置された 主な私立理工系専門学校

設置年	開校当時の名称	現在の大学名
1944	法政大学航空工業専門学校	法政大学理工学部
1944	中央工業専門学校	中央大学理工学部
1944	立教理科専門学校	立教大学理学部
1944	同志社工業専門学校	同志社大学工学部
1944	東京明治工業専門学校	明治大学理工学部
1944	青山学院工業専門学校	青山学院大学工学部
1944	関西学院専門部航空機科	関西学院大学理工学部
1944	関西工業専門学校	関西大学工学部

9

## 中央工業専門学校の設置

- 1943年12月24日 評議会を開催(寄附行為改正の件)
- 12月30日 中央工業専門学校設立認可申請  
(入学定員・機械科100人、航空機科100人)
- 1944年3月13日 中央工業専門学校設立認可
- 4月1日 中央工業専門学校開校
  - 同日 商学部・専門部商学科募集停止、  
商学部在学学生を経済学部に移籍
- 実は60周年記念事業の一環として  
「工学部設置」が掲げられていた
  - 1935年(創立50周年)  
「来ルヘキ十年ノ記念事業トシテ完全ナル工学部を増設」

10

中央工業専門学校新設理由

中央大學一明治十八年ノ創立ニ係リ本年ヲ以テ正ニ第六十年ヲ迎フ 其ノ間幾多變遷ヲ經キリト雖モ皇道精神ヲ以テ建學ノ根本ト爲シ 實業開發ノ技術風ニ確立シ之ヲ以テ終始一貫其ノ經營業ノ教育トノ努力ヲ察シテ 兩身ノ人材ハ一數萬ヲ以テ算ヘ爾來社會ノ各方向ニ其ノ法律、經濟、商業ノ知識ヲ發揚シ就中卓越タル地歩ヲ占メテ世上重キヲ爲ス者枚擧ヘ難クモ其ノ中ニ實業界ノ一大盛衰ト謂フベシ 然レド雖モ邦安ノ大業ト專門教授等ノ期待ハ所ニ置カズ 文化科學ノ進歩ニ對シテ實業ノ繁榮ナルヲハ言フベシ

中央大學一創立五十年ノ式典ヲ觀ケルニ慶賀ムルベキ六十年ノ記念事業ヲシテ定メテ工業専門學校ヲ以テ此ノ方向ノ教育ニ大ニ躍進スルベシト期シ漸次其ノ準備ヲ進メ來リテ斯ク及シキニ及リテ其ノ分割ヲ細ラシテ以テモノハ實ニ鞏固ナル基礎ニ立テテ機械工料ニ專部ヲ新設セシガ爲ナリシナリ

今ノ記念ノ年ニ當リ是ノ之ヲ實施スベキノ際ニ會ス 特ニ目下大東亞戰爭ハ思慮難クシテ精神交社諸國ノ振興ヲ要請スルト共ニ武力戰トシテ自然科學ノ興隆ヲ望ム兩方相俟テ戰力増強ノ必要尙ハ欠ナリ 故ニ本學ニ從テ 諸學科ヲ加フルニ工業科ヲ増設スルハ正ニ此時ニ在リト思惟シタガモ現時完全ナル大學部ノ施設ニ必要トスル物資等類モトスルハ容易ナラズ 同テ此ノ緊急ナル時局ノ急務ニ應ジテ先ツ工業専門學校ヲ新設シテ他日工業部完成ノ基礎ヲタルモノトシテ 出身學生ヲシテ一日ニ厚ク國家ノ戦力増強ノ功加シテ實際利便能ク務事ニシテ 尙モ此ノ爲メ暫ク兼テ重點トスベキ航空機料ヲ機械料ノ二科ニ之ヲ限定シ全力ヲ傾倒シテ教育ノ改善ノ最良途ニ施設セシムルヲ期ス

中央大學

昭和十九年七月

資料: 中央工業専門学校新設理由 (出典: 図説中央大学1885-1985)

中央工業専門学校(校長: 林頼三郎)

- 機械科長: 中尾金房(元海軍大学校教官)
- 航空機科長: 宮原旭(日本小型飛行機技術部長)
- 各学科1学年100名3年までで合計600名
- 17歳以上の旧制中学校卒業程度の学力
- 200名に対し2849名が出願、235名合格。
- 校舎は駿河台校舎
  - ただし実験・実習施設がない
  - 新潟鐵工所蒲田工場(JR蒲田駅そば)
  - 日本小型飛行機府中工場(府中刑務所そば)で実習



## 戦後

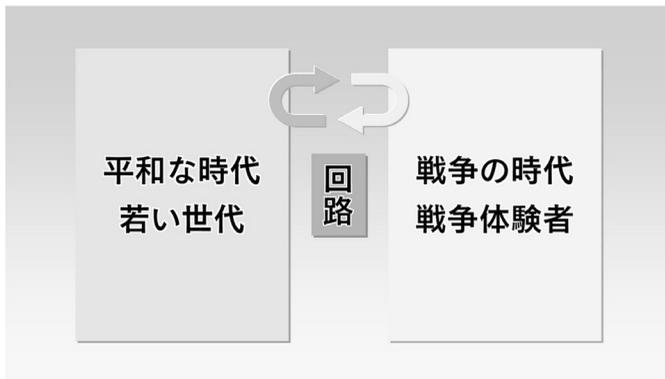
- 戦時体制の払しょく
  - 航空機科→工業物理科
- 1949年4年制「新制大学」制度が始まる  
→新制大学移行を機に工学部に改編する動き
- 1949年 新制中央大学工学部の設置
  - 土木工学科、精密工学科、電気工学科、工業化学科、一般教養の定員226名で開始
  - 中央工業専門学校は廃止
  - 1962年4月、理工学部へ
- 卒業生の進路
  - 初年度入学者→157人が1947年に卒業
  - 『中央大学学員名簿』→新制・旧制の本学文科系への入学が目立つ

# 戦争の記憶をつなぐ

中央大学総合政策学部

松野良一

<http://www.matsuno-lab.com>



# 戦争を生きた先輩たち



中央大学出版部学出版部

# 証言で学ぶ沖縄問題

編著者  
川平成雄・松本実・長嶺特典  
中山さく  
宮城喜久子・上原当美子・曾天間朝佳  
山田義邦  
仲底晋光・玉城功一  
大田静男  
南條喜久子・知花徳盛・名高隆一  
北上田 壽  
具志堅謙松  
高良倉吉・島尻克美  
西山大吉・吉野文六  
高良鉄美・喜屋武幸雄  
謝花悦子・宇佐山良有  
宮城武雄・平良悦秀

「証言で学ぶ」  
「沖縄問題」  
観光し知らない、学生のために



松野良 中央大学ELPジャーナリズムプログラム

歴史的事実を当事者が語る

集団自決から孤島へ脱走して生き延びた少年。  
重傷の同胞地に手帳簿を渡した鉄血勤皇隊員。  
ご学業で戦中沖縄地帯に突入したの次郎。  
沖縄のガッツと呼ばれた原爆地帯運動家。  
戦争マラソンと陸軍中野学校。民間防衛戦時連絡事件……

後世に残されるべき証言録

中央大学出版部 定価：本体2,700円(税別)

中央大学出版部学出版部